

# ちがさきの石仏

石仏調査ニュース

第19号

**発行**  
茅ヶ崎市教育委員会  
茅ヶ崎市文化資料館  
**編集協力**  
文化資料館と活動する会  
(民俗行事部会)  
**連絡先**  
〒253-0055  
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18  
TEL:0467-85-1733  
e-mail:shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp

## 円蔵中学校の二年生10人と

### 円蔵の石仏・社寺を訪ねました

九月二十六日金曜日、外歩きは汗ばむほどの良い天気でした。文化資料館と活動する会民俗行事部会の6人は、中学校の学習にまねかれて生徒たちと地区の石仏や社寺を回りました。

円蔵中学校のホームページに次のようにあります。

「総合的な学習の時間を3E(スリーイー、Enzoh Essential Educationの略)と呼び、平成10年度から子供たちが、知識だけでなく体験を通していろいろなことを学べるように設定し、実践してまいりました。」

この中に二年生が参加する「地域の歴史と民俗 歴史探訪」という分野があり、3組の10人が参加したのです。民俗行事部会から小川正

恭、加藤幹雄、坂井源一、宗建、源邦章、平野文明が対応しました。後日、参加した生徒諸君から、お礼と感想文が届いたので、その文章を交えながら、この日の様子を紹介します。

8時40分、図書室に集合。先生方の挨拶・自己紹介。その後、生徒たちの案内で理科室に移動。

8時50分 生徒諸君と対面。  
今回の担当は鎌田一昭先生(理科)でした。私たち部会員の自己紹介。資料として次のものを配りました。

○「中学校付近の歴史を訪ねる」学ぶことから(学習の要点をまとめたもの)

資料1 最近の地図

資料2 江戸時代 安政六年(一八五九)の円

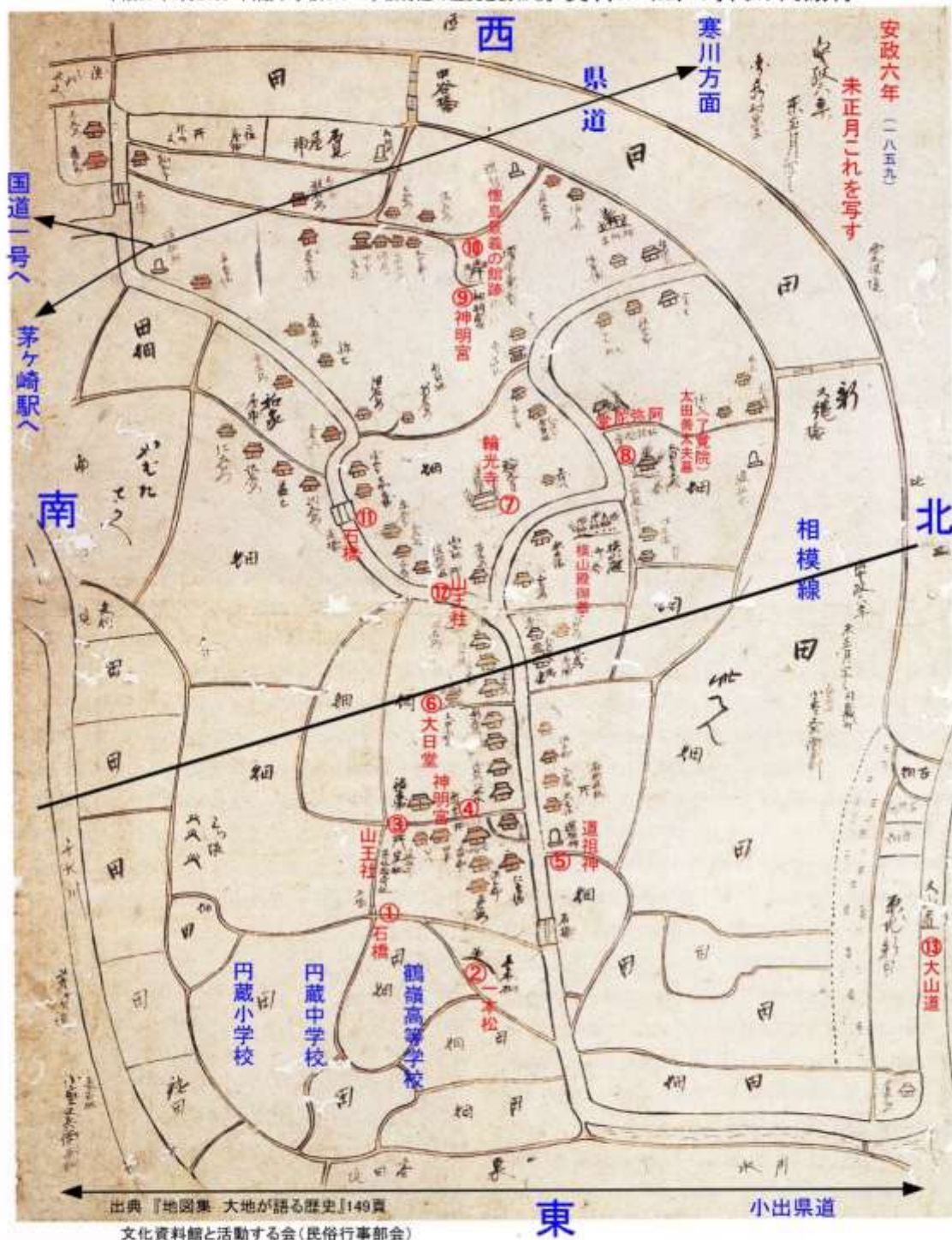
蔵村の絵図など

引き続き、黒板に坂井さん作成の資料1、2の拡大版を貼って、まず小川さんが地形の特徴、戸数や人口の変化、地名などについて、平野が江戸時代の円蔵村の成立、領主(横山氏・大(太)田氏)と村支配、懐嶋景能などについて説明しました。また、現地を回っていると途中に「猿」が出現する。何匹の猿を見つけることができるかという課題を設けました。



9時45分 中学校を出発。男子と女子に分かれ、それぞれが資料1、2を見ながら、見学す

平成26年9月26日 円蔵中学校3E「学校付近の歴史を訪ねる」資料2 江戸時代の円蔵村



る所、二か所に先導することにしました。地図と絵図をよく見るようにとの配慮からです。まず女子グループが案内。

①石橋跡、②小字一本松に問題なく到着。両方とも今は面影もないが、絵図に見えることなどを加藤さんが説明。次は男子グループの先導。

③山王社跡 今は稲荷社がある。方々に神社などが祭られていることを加藤さんが説明。

④神明宮 伊勢神宮を勧請したものなど加藤さんが説明。次は女子の先導。



⑤鶴田町の道祖神 双体であること、市内にある道祖神の数、どんど焼きのことなどを坂井さん説明。

⑥大日堂(真光寺) 少し奥まっているので、なかなかたどり着けない。ご本尊の大日如来、境内にある弘法大師と相模国準四国八十八ヶ所めぐりのことなどを源さんが説明。江戸時代の領主、横山氏との関係を平野説明。生徒さんの感想は次のとおり。



**岩崎泰作** 今日わざわざ僕たちに円蔵の歴史を教えてくださいありがとうございます。ありがとうございました。

真光寺が家の中にあるなんて思ってもなかったから、とてもびっくりしました。これからは今日の事を忘れず、円蔵の歴史なども学んでいきたいです。

**長谷川遙香** 本日は、お忙しい中、円蔵中学校にお越しいただきありがとうございます。普段通っているような道にも歴史はたくさん隠されていて、とても勉強になりました。特に印象に残ったのは、大日堂の中を見ることができたことです。とても貴重な体験ができたと思います。また、あちこちに道祖神があったことも印象的でした。当時は病気をなおすためにひたすら神様におがむしかなかったのだということがよく感じられました。とても面白かったです。

**吉野康太** 今回は僕たちのためにわざわざおいでいただきありがとうございます。僕が一番興味を持ったのは大日堂です。なぜなら昔のまま保存されていて、すぐくすてきたと思いましたが、あと輪光寺のかっぱについての話興味深かったです。日本で有名な「かっぱどくり」が茅ヶ崎にもあると知っておどろきました。今回本当にありがとうございます。

次は男子グループの先導。  
⑦輪光寺 最短の道路を歩かなかつたので回り道となったが先導をまかせました。本堂前の



ツバドツクリの昔話と河童について宗さん説明。

賽銭箱にある地藏菩薩を表す梵字の「イ」、ご本尊が地藏菩薩であること、境内にある二体の地藏立像、庚申塔と銘文の事などを平野説明。弘法大師の坐像と立像を宗さん説明。カ

**角田智哉** 今日はお忙しい中、円蔵にきていただきありがとうございます。僕が一番印象に残ったのは輪光寺のカップや猿です。理由は、カツは見たことなかったのですが、イメージと少し違っていたが、とても迫力があって、猿は、かなり昔に作られていてすごかったからです。道祖神がたくさんあつて興味を持ちました。歩いていたら道端に道祖神を探してみたいです。オチョバンバの昔話がおもしろかったです。江戸時代に円蔵は円蔵村と呼ばれていたのに驚きました。今日は、一日ありがとうございます。

⑧阿弥陀堂(了覚院) 領主大(太)田氏と了覚院の関係、境内の石仏、オチョバンバの事などを坂井さん説明。

(予定時間をオーバーしたので、これからは部会員が先導することにした。)

⑨神明大神 祭神の天照大神のこと、伊勢神宮の勧請と鎮守の設置、神社彫刻などを平野説明。裏側に回って、懐嶋景義(能)の立像と⑩懐嶋氏の館跡を見た。

**青木 渚** 今日はお忙しい中、円蔵中学校に来てくださり、ありがとうございます。私が一番印象に残っているのは神明宮にも懐嶋景義の石像があったり、そのほかにもたくさん大切な

ものがたくさんあるということです。私の家の近くにあるのですが初めて見ました。とてもビックリしました。こんな貴重な体験ができてとても勉強になりました。本当にありがとうございます。

**大池玲未** 今日はお忙しい中、私たちに円蔵付近の歴史について教えて下さりありがとうございます。いろいろなお寺や神社に行きましたが、一番、神明宮にあった、懐嶋景義のお墓と石像が印象的でした。理由は懐嶋景義は、源頼朝の時代にこの近くで生きていたことがわかり、とても貴重なものを見ることができたと思っただけです。これから、神社とかお寺を見たときは、興味を持って少し見てみようと思います。本当にありがとうございます。

**大川拓真** 今日はお忙しい中、円蔵中学校に来てくださり、ありがとうございます。円蔵の神社や寺などまつられている神様が知ることができました。例えば、天照大神はスサノオとけんかして洞くつに入ってしまったって太陽が隠れてしまったというのを聞いて、アマテラスは太陽の神なんだなと言うのを感じました。

⑩石橋跡 今は石橋はないが、そばの商店の名前に残っていることを小川さん説明。



⑫山王社 境内にある道祖神のことなどを平野説明。

12時 学校に帰着。理科室に戻ってまとめ。宗さんが模造のカップドックリを披露。生徒さんからお礼の言葉。コース全体についての生徒さんの感想は次のとおりでした。

**加藤 栞** 本日は大変お忙しい中、私たちのために時間をさいて円蔵付近の歴史について教えてください、大変ありがとうございます。私がすんでいるのは今は鶴が台ですが、昔は円蔵に住んでいたのを見たことのある風景や道に、

こんな深い歴史がかくされているなんて知らなかったもので、とても新鮮でした。本日学ばせていただいたこの文化、歴史を私たちから次の世代へつなげて伝えつなげていきたいです。本当にありがとうございます。

**福岡満里奈** 今日はお忙しい中、円蔵中学校にお越し頂きありがとうございます。私は、お祭りが大好きで、いろいろな神社に行くのですが、しつかりと地蔵や如来像など気にかけてから見たことがなかったので、今回、良い体験をし、地蔵や如来像を見るとき意識が変わり、これからお寺に行つて地蔵や如来像を見たときは一つ一つの表情や格好を見て、気になったものは調べていき、まとめたいと思いました。

**山縣勇斗** 今日はお忙しい中、僕たち円中生のために来てくださり、ありがとうございます。今日の学習をする前は僕たちの身近にある神社や歴史などにもあまり関心がありませんでした。ですが、学習をした後は自分たちの身近なところにはいろいろな深い歴史があったことに気づき、興味が出てきました。ありがとうございます。

なお、コース内で見た「猿」は、輪光寺境内の庚申塔に6匹、山王社に3匹でした。

(文責 平野)

**室田永昌寺石燈籠の銘「臺徳院殿」は誰**

金子 栄司

永昌寺の境内に寛永寺燈籠または増上寺燈籠(以下寛永寺型)とよく似た石燈籠がある。基礎から宝珠先端までの高さは二メートル弱。寛永寺型には指図(寸法絵図)らしい図面(増上寺徳川家廟所の風景(八)伊藤友巳)が残されて、総高さ、「地形より二尺八寸八分(約三メートル)」と示されているので、寛永寺型の三分の二の大きさである。その柱に刻まれている銘文は

奉獻石燈籠 一基

高臺院殿 □(菩)提前

貞享三丙寅閏三月廿一日、

田中又左衛門尉

檜処(久)

銘文の高台院殿という人物はだれなのか。田中又左衛門尉の名前の「檜」字が手偏、崩し字では木偏が手偏のように書かれるが、下の字が「処」か「久」か、二字続けると、なんと読むかが分からない。以下その説明を書いておく。

大名旗本諸家の系譜を集成したものに『寛政重修諸家譜』がある。それらを含む索引書の『読史備要目次(東大史料編纂所編)』の「法号并称号索引」(この項)を見ると「高臺院」の法号



に五名がヒットする。五名の中には当然、高臺院湖月心会(浅野氏、寧子、豊臣秀吉室)がある。広く知られている法名で高臺院といえれば高臺寺の開基「ねね」でありそれ以外を知らない。

残る四名をさらに絞り、「指巖道徹・酒井忠隆」を有力候補に選ぶ。『寛政重修諸家譜』は「近代デジタルライブラリー」が翻刻されていて使いやすい。

巻第六十一、清和源氏。義家流松平別流。忠利系酒井氏に忠隆が出ている。「貞享三年(一六八六)閏二月二十一日。小浜にをいて卒す。年三十六。指巖道徹高臺院と号す。葬地忠直におなじ(小浜空印寺)。「紋所は丸に劔鳩酸草(劔片喰)。「酒井忠隆」の検索はウィキペディアの記述内容が分かりやすい。

高臺院殿は若狭小浜藩第三代藩主酒井忠隆であると特定できた。卒年月日も石燈籠に刻んである年月日と一致する。

次は、石燈籠を奉献した田中又左衛門尉の

名前である。小浜藩の枢要な地位の家臣であることが想定できる。

『小浜藩士由緒書、御家中由緒書・五』(早稲田大学古書籍総合データベース)というのがある。以呂波似の順「多」の項に初代、本国上州新田田中村、田中又左衛門直勝。二代、田中又左衛門楢久が記述されている。名前の「処」は「久」であった。素直に楢久と読める。楢久は万治二年(一六五九)家老職に就き、貞享四年(一六八七)土大将格式、禄千二百石となり隠居。元禄十年(一六九七)十一月江戸で病死。八十歳。

この石燈籠は檀家さんから奉納されたものと伺っている。寛永寺燈籠ともいわれているようでもあるが、一般的にいう寛永寺型とは異なることは先に述べた。寛永寺型では燈籠の笠に三つ葉葵紋を表すが、永昌寺の石燈籠の笠には丸に劔片喰紋となっている。

徳川家と酒井家は遠い姻戚関係という。酒井家は丸に劔片喰を紋所としているが元々は三つ葉葵紋であった。徳川家に三つ葉葵紋を譲ったとする三説の一つが酒井家である(『改正三河後風土記』に「三葵御紋御治定并酒井家酸醬紋付戸田宗光帰順の事」の段に詳述)

「大正十三年(一九二四)酒井家東京本邸内

の墓地を改修」の記述があった。忠隆の葬地は小浜空印寺(八百比丘尼入定地)、現在も酒井家墓地に忠隆の墓石がある。(小浜市ホームページ)墓地改修とこの石燈籠との関連はないのだろうか、気になるところである。

### 『柳島の観音霊場巡拝塔の銘文あれこれ』のフォローアップ

金子 栄司

前号掲載の『柳島の観音霊場巡拝塔の銘文あれこれ』に関して藤間雄蔵氏から不確かな記述や想像で書いたいくつかについて、ご教授と関係する収蔵資料を拝見させていただいた。感謝申し上げます。要点を記録しておく。

#### 一、紀年銘

背面、皆弘化三年(一八四六)□丙午。□には「在」が入る。「ひのえうまにあり」と訓む。木星は漢名で歳星といい、冬至の月の歳星の位置で十二支の「何どし」ときめた。木星は公転周期が十二年でほぼ一周するので十二支を充てて表した。

二、「救世地藏尊」も藤間善五郎(柳庵)の筆か藤間家には、書を能くした柳庵の書や軸、それらを籠字にして残されたものが所蔵されている。「地藏菩薩種子カ・救世地藏」を拝見。銘の

文字と酷似している。柳庵の筆であった。

三、小川七郎右衛門と藤間善五郎の年齢

小川七郎右衛門の墓碑銘の拓本から、行年六十八歳。安政六(一八五九)乙未星。藤間善五郎の生年は享和元年(一八〇一)。十歳違いであった。

四、「奉献百番観世音菩薩」が正面

この面の銘文を自然光で明瞭に写すことは太陽の位置とよくよく相談しなければならない。藤間雄蔵氏が撮影した写真を載せておく。



五、天保十四年(一八四三)伊勢参宮

藤間善五郎と小川七郎右衛門が伊勢参りをしているが、その十三年前の文政十三年(一八三〇)に藤間善五郎が大和(奈良)を訪れている。数えて三十歳の時である。「文政十三年七月藤間善五郎大和廻歴之…以下失」「大和国宇智郡五条外栄山寺鐘銘小野道風勅筆」の拓本を購った添え書きから知れる。

## 相模国準四国八十八ヶ所巡り

源 邦章

一、四国八十八ヶ所霊場とは

徳島・高知・愛媛・香川の4県に亘り、八十八ヶ所の霊場を設置し、これを廻り参拝する事を「四国遍路」または「お遍路さん」と言っている。

旧国名阿波に二十三ヶ寺、土佐に十六ヶ寺、伊予に二十六ヶ寺、讃岐に二十三ヶ寺あります。八十八ヶ所の成立については定説はありませんが鎌倉時代より高野聖が四国へ渡り、阿波から巡ったのが始まりという説が有力です。全距離は千四百キロメートル余りに及び、歩いては六日以上かかるとの事です。

二、相模国準四国八十八ヶ所巡りの誕生

藤沢鶴沼の浅場太郎右衛門の父が下総国相馬郡に四国八十八ヶ所巡りを真似た霊場があることを知り、相模国にも霊場を作りたいと考えました。太郎右衛門は父の意志を継ぎ、近在の普門寺の善応密師に相談し、善応は弟子の浄心に四国より砂を取り寄せ、大師像を作り、文政三年(一八二〇)から翌年各所に配置しました。

現在では藤沢四十四ヶ所、茅ヶ崎二十五ヶ所、鎌倉九ヶ所、寒川九ヶ所、横浜一ヶ所に渡り、

総距離は八〇キロメートルに及んでいます。配置は浅場氏が中心で普門寺に相談した事により、光栄ある第一番札所は普門寺の本山の藤沢感応院であり、最終八十八番札所を普門寺に置いていきます。その範囲は藤沢を中心に藤沢宿の助郷の範囲と言われています。(定助郷と加助郷の範囲)

三、弘法大師石像

各霊場に安置されている弘法大師の石像は、文政三〜四年(一八二〇〜二一)に多く造られ、順次安置されたもので、安置先は既に決まっていた様でした。

弘法大師像は、台石の上に法衣を着た大師が座り、右手に五鈷杵(ごこしよ)を持ち、左手に数珠を持った僧形です。台石には正面に沓(くつ)と水差しが彫刻されています。

大師信仰は元来真言宗ですが、曹洞宗や浄土宗も含まれていました。大師堂については、当初より建造されたかは不詳ですが、鶴沼浅場氏墓地、津村宝善院、普門寺別当の三ヶ寺が立派。次いで最近の建造では、西久保の宝生寺と柳島の善福寺が比較的整っているとされています。

四、詠歌

本四国のご詠歌は、多数の人々により長い年月を掛けて作られたので、良く洗練され巧みに

仏教思想を取り入れています。相模のご詠歌は一人の人が、永年にわたり作ったもので、並々ならぬ努力があつたと思われれます。内容的には仏や神の恵み、稔りの秋、自然などを詠いながら、その言葉の中に地名、山号名、寺院名、本尊名等を巧みに織り込んでいます。しかもそれを一人で作上げたものであると言われていますが、本当に偉大だと思えます。因みに柳島・善福寺の二基のご詠歌を掲げます。

打ちなびく 春は緑の 柳島

夏は涼しき かげとこそなれ



柳島善福寺の弘法大師像二基

吹く風に 靡く柳の 緑より

なおしたわるる 法の恵みは

以上のように両ご詠歌とも柳の字が記され

ています。



寒川町内から移された像

五・茅ヶ崎に於ける大師像

(1)茅ヶ崎の弘法大師像は現在二十五基あります。当初は二十四基でしたが円蔵寺にある二基の内一基は、移ってきたものです。

茅ヶ崎市内で一寺に大師像が二基あるお寺は、柳島の善福寺、茅ヶ崎の円蔵寺、赤羽根の西光寺の三寺にあります。善福寺へは同じ柳島の地蔵院、円蔵寺は前述しましたように寒川の廃寺・東覚寺、そして西光寺は同じ赤羽根の満蔵寺薬師堂から移っています。

(2)観音堂・地蔵堂等の堂内安置のお大師様は、小和田の阿弥陀堂、北茅ヶ崎の観音堂、円蔵の大日堂、堤の地蔵堂の四ヶ所にあり他は寺院の境内に鎮座しています。寺院の境内にあるものでも多くは大師堂を作り堂内に安置されていますが、一部の大師像は露座のままになっています。

す。(西光寺の二基や玄珊寺等)

(3)平成二十二年に文化人クラブでこの八十八ヶ所巡りを計画、同年中に茅ヶ崎の二十五基(二十二ヶ所)を巡りました。(延四日間で二十五基)

①茅ヶ崎・南湖・松尾・柳島・下町屋方面 八基(六ヶ所)

②小和田・菱沼・赤羽根方面 七基(六ヶ所)

③浜之郷・円蔵・西久保・北茅ヶ崎方面 六基

④香川・下寺尾・堤・甘沼方面 四基

その結果、茅ヶ崎市内の二十五基は全て現存していました。その後、茅ヶ崎市外を巡っていますが、寒川町内の九基は現存していますが、藤沢市内の四十四基の内二基(藤沢舟久保不動院と砂山観音堂)が探し当てられませんでした。八十八ヶ所巡りは、あと藤沢の一部と鎌倉九基・横浜一基を残していますが一応終了させました。残り是非他日巡る機会を作りたいと思っております。

参考図書

樋田豊宏著『相模国準四国八十八ヶ所』(平成十六年 自刊) 一七、二十一、二十二頁



茅ヶ崎の神社彫刻 その6  
鶴に乗って空を飛ぶ仙人のはなし

平野 文明



本村八王子神社  
鶴に乗ったおじいさん

一 平成二十二年九月発行の「石仏新聞」十四号に「本村八王子神社の彫刻 ― 剣を持つ男の正体」を発表しました。同神社の向拝(こうはい・ごはい)彫刻の中心は、ヤマタノオロチ退治で奮闘努力中のスサノオノミコトですが、そのそばに鶴に乗って空を飛ぶおじいさんの彫刻があり、このおじいさんの正体がわからないと書いたところ、文化資料館で学芸員の仕事をしているA女史か

ら、「鶴に乗る仙人」をキーワードにしてパソコン



本村八王子神社 向拝の彫刻

で画像検索するとたくさんヒットするよとアドバイスがありました。さっそく試して得たいくつかのネット情報をもとに、今回は、このおじいさんの正体を考えてみたいと思います。画像は、全国各地からいろいろな人がアップしているサイト、つまりホームページやブログにあるものです。サイト再検索のために、本来ならそのURLを表示するべきですが、ここに文章で表現する場合は煩雑になることから、サイト内で用いられている用語をへんてくって記しておきますので、興味を持たれた方は、これをキーワードにして

検索してみてください。(しかし、キーワード検索ではうまくヒットしない場合もあることをこ

二

とわっております。) 鶴に乗っているおじいさんは中国生まれの仙人でした。しかし同じような仙人は何人かいるようです。たとえば、

(事例一)日光東照宮の不思議再発見 その二 六 陽明門背面の霊獣に乗った仙人たちの彫刻」というサイトには六人の仙人の彫刻などが紹介されていて次のように説明されています。

〔略〕陽明門正面には儒教で理想とされる人物・聖賢の彫刻が施されていますが、背面の下層組物間には正面とは異なり、道教で理想とされる人物・仙人の彫刻が施されています。(略) 陽明門背面の下層組物間の霊獣に乗った仙人たちの彫刻は下記の通りです。何故、この七人が選ばれたかは不明です。口から魂を吐き出している鉄拐(てつかい)仙人。鳳凰に乗った梅福(ばいふく)仙人。鶴に乗る王子喬(おうしきょう)。天空を飛び回っている費長房(ひちしようぼう)を見上げる3人の人物。笠で空を飛ぶ鐘離権(しょうりけん)。龍に乗る黄仁覧(おうじんらん)。鯉に乗る琴高(きんこう)仙人。〔注 仙人の名前の読みは筆者。以下同じ〕



合、鶴に乗って巻物を広げたり笙を吹いたりする仙人は王子喬と呼ばれていることがわかります。しかし、王子喬としない例もあります。

(事例九) ブログ(大國町舞台 子供流鏑馬 立川流彫刻)に、長野県大町市にある若一王子神社の夏祭りに登場する山車(舞台と呼ばれている)の彫刻が紹介されています。その屋根破風の懸魚(けぎよ)にある、鶴に乗って巻物を広げている仙人の彫刻を控鶴仙人、また別の山車にある、鳳凰に乗って笙を吹く仙人を梅福仙人と解説してあります。

乗っている鳥の種類と、持ち物の違いによって仙人の名前が決まると思うのですが、サイトの世界ではゴチャゴチャになっているようです。

(事例十) (鏑の日記 産泰神社③)は、群馬県前橋市下大屋町の産泰神社境内の金刀比羅宮にある鶴に乗って巻物を見ている仙人を紹介して「鶴と仙人とくれば王子喬と覚えてきましたが、王子喬は笙を吹いているのですがこちらは巻物を持っています、調べてみたら控鶴仙人でした」と注記しています。王子喬と控鶴仙人を区別した例です。

(事例十一) (雄峯閣 ―書と装飾彫刻のみかた― 梅福(ばいふく)は、高尾山頂にある東京都八王子市 葉王院飯綱権現堂(欄間)の鳳凰

に乗って笙を吹く仙人の彫刻を紹介し、『列仙全伝』という文献をひいて鳳凰に乗るのは梅福としています。これは、鶴ではなく鳳凰に乗っていることをもって、仙人の名を特定した例です。

### 三

以上見てきたことから、サイトの世界では、鶴に乗り巻物を広げている、あるいは笙を吹いている仙人を王子喬、または控鶴仙人と呼び、鳳凰に乗る仙人を梅福仙人と言っていることがわかります。さらに、姿は表されていないのですが、費長房という仙人も登場しています。そこで、サイトの世界から離れて、これらの仙人について文献ではどうなっているかを調べてみました。

中国の仙人を絵入りで紹介する文献として、『有象列仙全傳』という書物があり、国立国会図書館デジタルコレクションで見ることが出来ます。この文献は、元本は中国で明の時代に作られ、それをもとに日本で慶安年間(一六四八〜五二)に出版されたものです。漢文で書かれている私の読みはあやしいのですが、要約して紹介します。

まず王子喬は、挿絵に、鶴に乗って雲の中を飛び、笙を吹く若者として描かれています。名を晋といい、周の靈王の太子。好んで笙を吹いてその音はすばらしかった。道士の浮丘公と嵩高

山(すうこうざん)という山に入つて三十余年の後、王子喬を探していた栢良とう人物に会い、「自分の家族に、七月七日に□山の頂上で待っていると告げて欲しい」と言った。その日が来て、王子喬は白鶴に乗って山頭に降りたが、家族の者はそれを遠くから見ただけで、その場所に至ることはできなかった。王子喬は数日して鶴に乗って飛び去った。そこで、後に山のふもとに祠を立てて(王子喬を?)まつた。(国立国会図書館デジタルコレクション『有象列仙全傳』卷之一 四二/五四コマ)

次に控鶴仙人 挿絵の絵柄は、控鶴は地上に立つて巻物を広げて見えて、そばに鶴が一羽います。名は属仁、いつも鶴に乗って武夷山で仙籍を校定していたと書かれています。「仙籍」とは何のことかわかりませんが、挿絵にある巻物がそれでしょう。(『有象列仙全傳』卷之二 一四一〜一五/七九コマ)

梅福仙人 挿絵はクジャクに似た不思議な霊鳥に乗って雲の中に浮かぶ姿。梅福は袖手(しゅうしゅ)している。字(あざな)は子真。漢王朝に仕えていたが王莽の専制から逃げて諸々の山で空洞仙君について仙人をめざした。願いが成ったある日、青鸞(注 神鳥 せいらん)を連れた金童玉女が詔(みことり)を奉じて紫雲の中から

降りてきた。梅福は詔を拝し、青鸞に乗って飛び去った。〔有象列仙全伝』卷之三 五三―四 / 七九コマ〕

**費長房** 挿絵は一人の仙人がひょうたんの口から頭を出し、横に立つ費長房を手招きしている様子。費長房はそれを見ている。費長房は汝南(河南省にある)の人。ある日市場で老人(仙人)が壺に入るところを目撃した。その老人と終日酒を飲み、仙人になろうと思った。家族の反対を乗り切るため、老人の教えのまま、一本の青竹を庭の木に掛けたところ、家族は費長房が首つて死んだと思った。仙人について深山に入り修練したが、もう一步のところで失敗した。辞するとき仙人は一本の竹と、一枚の呪符を渡した。費長房はその竹にまたがって家に帰り、先に家族が葬ったのは単なる竹の棒だとあかし、呪符を使っていろいろの不思議を行った。〔有象列仙全伝』卷之四 六〇八 / 七三コマ〕

ネットで調べていますと、もう一人鶴に乗る仙人がいました。「黄鶴楼(こうかくろう)」を検索すると、ウイキペディアに「現在の中華人民共和国武漢市武昌区にかつて存在した楼閣。現在はほぼ同位置に再建された楼閣がある。武漢随一の名勝地であり、中国の「江南三大名楼」のひとつ」と書かれています。そしてこの楼の伝説が

紹介されていますので要約します。

昔、酒屋にみすぼらしい身なりの仙人がやってきて飲ませて欲しいという。ただで酒を飲ませてくれるが、金がない」と言い、代わりに店の壁にみかんの皮で黄色い鶴を描き、去った。客が手拍子を打ち歌うと、それに合わせて壁の鶴が舞った。そのことが評判となつて店が繁盛した。その後、再び店に仙人が現れ、笛を吹いて、壁から出てきた黄色い鶴にまたがり飛び去った。

不思議な鳥に乗る仙人は、中国にはもつといふかも知れませんが、今は、鶴に乗り笙を吹く王子喬、同じく巻物・書物(『仙籍』)を見ている控鶴仙人、黄色の鶴に乗る黄鶴楼の仙人、青鸞(せいらん) 神鳥に乗る梅福、そして竹にまたがって空を飛ぶ費長房の五人を知りました。黄鶴楼の仙人の彫刻はまだ見たことがないのでこれを除き、他は社寺仏閣の壁などに彫刻で表されているのです。梅福が乗る青鸞は日本ではなじみが薄いのか、鳳凰に代わっているようです。とすると、今回のテーマに戻つて、本村の八王子神社の向拝にある彫刻の老人はこの中のどの仙人に当たるのでしょうか。絵柄は、鶴に乗って先端に布きれのようなものが結び付けた竹の棒を持つています。先に紹介した中国の仙人に、竹

の棒をかつぐ者はいませんでした。また、いろいろのサイトに紹介されている彫刻の仙人たちの中にも竹の棒をかつぐものはいませんでした。今のところ類例がなく、珍しい絵柄だといえます。にもかかわらず結論を下しておけば、いささか強引ではありますが、竹の棒が描かれているところから、竹に乗って空を飛んだ費長房であると思えます。

(平成二十七年二月十五日)

#### 【編集後記】

円蔵中学校の生徒さん達と史跡巡りをしたのは夏の日差しがまだ肌を刺す時期だった。お礼文を頂いたので本誌掲載をお願いしたところすぐに応じて下さったのだが、発行に半年近くかかってしまった。生徒さん達ももうすぐ三年生元気で、かつ大いに勉学に励んでください。

今回はインターネット情報を使った文章が二つあった。インターネット情報も上手に使えばそれなりに効果が期待できる例と思う。

※ご不明の点等は1頁に記載の連絡先までどうぞ。なお、本誌バックナンバーは茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。  
([http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka\\_rekishi/bunkashiryokan/kankobutsu/1006133.html](http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/bunkashiryokan/kankobutsu/1006133.html))